

2022年10月13日(木)

平城第649次調査 記者発表資料

興福寺東金堂院北面回廊の発掘調査

法相宗大本山 興福寺
国立文化財機構 奈良文化財研究所

調査地：奈良市登大路町 興福寺東金堂北東

調査期間：2022年7月6日(水)～(継続中)

調査面積：331㎡(南北15m、東西28mのうち支障物を除いた範囲)

現地見学会を開催します

2022年10月15日(土) 10:00～16:00 ※小雨決行

新型コロナウイルス感染症対策のため、定時での説明はおこないません。
巡覧して頂き、随時、職員が説明します。

概要

東金堂院北面回廊の規模と構造を確認しました。その結果、東金堂院の東西規模が100m以上となり、従来の復元案より大きくなることが判明しました。東金堂院の構造や興福寺の中での東金堂院の性格を考えるうえで重要な成果となりました。

1. 調査の経緯と目的

興福寺の沿革

興福寺は、藤原不比等が奈良時代はじめ(8世紀前半)に、平城京左京三条七坊の地に建立した藤原氏の氏寺であり、南都七大寺の一つです。奈良時代から中世を通じて、中金堂院を中心とする大伽藍を誇りました。たび重なる火災に遭っても、主要な堂塔は創建期の位置と規模を踏襲して再建が繰り返されてきたことが、これまでの発掘調査等でわかってきました。現在、興福寺では『興福寺境内整備構想』(1998年)に基づき、寺観の復元・整備を進めています。これにともない、奈良文化財研究所では1998年以来、中金堂院や南大門などの発掘調査を継続しておこなっています。直近の2年間は東金堂院の発掘調査に取り組んでおり、今回の調査もその一環です(図1)。

東金堂院は中金堂院の東に位置し、東金堂と五重塔を中心とする区画です。周囲を単廊と築地塀で取り囲んでいたとみられ、北面と西面が礎石建ちの単廊、東面と南面が築地塀と考えられています。奈良時代の興福寺境内の様子を伝える平安時代末頃に成立した『興福寺流記』によると、東金堂は神亀3年(726)、五重塔は天

平2年（730）の創建で、東金堂院の門・回廊・築地塀も同時期に創建されたとみられます。創建以後、東金堂と五重塔は5回の火災に遭い、現存する東金堂は応永22年（1415）、五重塔は応永33年（1426）再建されたものです。

これまでの調査成果

東金堂院の回廊と門は現存していませんが、防災工事にもなう発掘調査（1975・1976年、興福寺）では、東金堂の北側で北面回廊の基壇や礎石を検出しており、一部の礎石は現在も地表に露出しています。この調査の結果、北面回廊は礎石建ちの単廊で、柱間寸法は桁行約3.4m（11.5尺）、梁行約3.5m（12尺）、基壇の幅は約6.4m（21.5尺）と判明しました。また、北面回廊の東端と考えられていた地点より東で形態などが異なる礎石を検出したことから、ある時期に北面回廊が東に向かって延長した可能性が指摘されました。この回廊も礎石建ちの単廊ですが、柱間寸法が不揃いであるとされました。

近年おこなった平城第625・640次調査（2020・2021年度）では、西面回廊、五重塔と東金堂それぞれの西正面にひらく門、基壇外装や雨落溝などを確認しました。これらの調査の結果、西面回廊は礎石建ちの単廊で、柱間寸法は門の近くで桁行約3.1m（10.5尺）、梁行約3.5m（12尺）、基壇の幅は約6.2m（21尺）であったことが判明しました。また、五重塔の南側では東金堂院の南面と興福寺全体の南面を兼ねる築地塀を検出し、その基部が遺存していることがわかりました。

調査の目的と概要

従来、創建時の東金堂院の規模は南北約110m、東西約51mと南北に長い区画で、東金堂と五重塔を中心とする区画と考えられてきました。しかし、近年の発掘調査の成果や文献資料などの再検討をふまえて、その規模を南北約110m、東西約130mと東西に長い区画と想定する見解が出されています。

そこで、北面回廊の規模と構造をあきらかにし、東金堂院の規模を把握することを目的として、今回の発掘調査を実施することとしました。調査区は、東金堂の北東約43mの位置に南北15m、東西28mのうち樹木等の支障物を避けて設定しました（331㎡）。調査面積331㎡のうち、12㎡が既調査区（1976年、興福寺）と重複しています。調査は2022年7月6日（水）から開始し、現在も継続中です。

2. 主な検出遺構

東金堂院北面回廊（図2）

北面回廊の一部（東西約28m）を検出しました。検出したのは、礎石やその据付穴・抜取穴、基壇及び基壇外装や雨落溝などです。

礎石と柱配置 12か所で礎石やその据付穴・抜取穴などを検出し、桁行7間分を確認しました。このうち、7か所には礎石が残存していました。残りの5か所の礎石は抜き取られていましたが、2か所で据付穴と根石を検出し、3か所で抜取穴を検出しました。7基の礎石のうち、4基は既往の調査で確認していたもので、今回の調査で新たに検出した礎石は3基です。礎石の上面の標高は95.5m前後です。北面回廊は梁行1間の単廊で、柱間寸法は桁行が約3.4m（11.5尺）等間で、梁行

は約 3.5m (12 尺) となります。礎石上面の標高、回廊の規模と構造は、既往の調査で判明している北面回廊の成果と整合します。

礎石は直径ないし一辺が 0.5～0.8m の大きさで、厚みは 0.3～0.5m です。石材は安山岩と花崗岩で、柱座をつくらない自然石が用いられています。一部の礎石には柱の当たり痕と被熱痕跡があり、直径約 0.36m (1.2 尺) の円柱が立った状態で被災したことがわかります。また、一部の礎石据付穴は、ほぼ同じ位置に重複するものがあること、瓦などの遺物を含むこと、根石に凝灰岩が使用されていることなどから、創建当初の位置をほぼ踏襲しながら据え直された可能性があります。

基壇 基壇の規模は、幅が約 6.3m (21 尺)、高さは北辺が 0.5m、南辺が 0.1m 程度、礎石からの基壇の出は南北とも約 1.4m です。基壇外装については、北辺で長辺 0.3m 程度の石を 3 段積んだ乱石積基壇を確認しました。基壇外装を構築する石材は凝灰岩や安山岩など多様な種類を用いており、大きさもばらばらです。また、基壇外装に転用されたとみられる凝灰岩切石が自然石と混在することから、この乱石積基壇は奈良時代の創建当初のものではなく、創建当初の位置を踏襲しながら平安時代に再建したものと考えられます。

雨落溝 基壇の北辺と南辺で東西方向に延びる雨落溝を検出しました。北雨落溝は上層と下層に分かれます。下層の北雨落溝の幅は約 0.5m です。上層の溝では瓦が捨て込まれた様子や、焼土が集中して堆積する様子を確認しています。南雨落溝は幅約 0.7m、深さ約 0.3m です。溝の堆積土には焼土が集中して堆積する様子を確認しました。南・北の雨落溝は長期間機能していたと考えられます。

暗渠 基壇を南北に横断する暗渠 4 条を検出しました。暗渠 1・2・4 は幅 0.3m、暗渠 3 は幅約 1.1m です。暗渠 1 は瓦組みです。なお、これらの暗渠は造られた時期が異なります。東金堂院内庭部の雨水を南雨落溝で受け、暗渠を通じて北雨落溝に排水していた様子があきらかになりました。

その他の遺構

土坑 東金堂院内庭部で、土坑 5 基を検出しました。土坑 1・2 は整地土上面で検出し、土坑 2 は 1.3m 四方の隅丸方形です。土坑 3～5 は土器や瓦を廃棄したものです。土器や瓦の時期については現在精査中です。

東西石組溝 北雨落溝の上層で東西方向の石組溝を検出しました。底石はなく側石のみで、溝の幅は約 0.6m、検出した長さは 2.6m 分です。基壇廃絶後の堆積土を切り込んで側石が据え付けられています。使われている石材には凝灰岩や安山岩が含まれ、乱石積基壇の石材を転用している可能性があります。基壇廃絶後につくられ、後述する南北溝が一時期流れ込んでいました。

南北溝 東西溝に合流する南北溝を検出しました。溝幅は約 0.7m、検出した長さは約 6.5m 分です。東西石組溝とともに、回廊廃絶後の調査地周辺の排水機能を担っていました。

参道 調査区中央やや東よりで、南東から北西に延びる幅約 2m の参道と、参道の南側にこれと併行して幅約 0.5m の素掘りの側溝を検出しました。路面に径 1～

3 cm の砂利を敷いています。この参道と側溝は回廊基壇を大きく削平して敷設されています。側溝は2時期分確認していることから、参道の改修があった可能性があります。江戸時代中期の作成とされる「奈良町絵図」などにみえる、春日大社参道から興福寺食堂・細殿に向かって延びる参道に該当します。

長方形土坑 調査区中央やや西よりで、東西約4 m、南北約0.8 m、検出した深さ約0.8 mの長方形土坑を検出しました。東側には削り出しで階段をつくり、底には直径約0.2 mと0.1 mのピットを確認しました。昭和18・19年(1943・1944)の興福寺の日記にみえる爆風除か貯水槽の可能性がありますが。

3. 主な出土遺物

奈良時代から近世までの土器・陶磁器類および瓦埴類が多数出土しました。

4. まとめ

① 東金堂院北面回廊の建物と基壇の規模・構造がわかりました。

北面回廊は梁行1間の単廊で、桁行7間分を検出しました。回廊の規模は桁行約3.4 m(11.5尺)の等間、梁行約3.5 m(12尺)で確定しました。今回新たに柱が円柱で直径が約0.36 m(1.2尺)であることがわかりました。基壇は平安時代には、北辺は乱石積の外装であったことがわかりました。基壇の規模は、幅約6.3 m(21尺)、高さは北辺が0.5 m、南辺が0.1 m、基壇の出は南北とも約1.4 mです。また、東金堂院の内庭部から、基壇を横断する暗渠を通じて、回廊の北へ排水していたことがわかりました。

② 東金堂院北面回廊の再建と変遷の状況がわかりました。

礎石や据付穴には、ほぼ同じ位置で重複するもの、凝灰岩や瓦などの遺物が含まれていることから、礎石が創建当初とほぼ同じ位置で据え直されたことがわかりました。すなわち、創建当初の位置と規模を踏襲して再建されたことがあきらかになりました。これは、これまでの興福寺境内の調査成果とも整合します。また、今回検出した乱石積基壇は、構築石材の加工の有無、種類や大きさが多様なことから、奈良時代の創建当初の位置を踏襲した、平安時代の再建にともなうものであることがわかりました。

③ 東金堂院の規模が従来 of 想定よりも大きくなることがわかりました。

今回の調査であきらかになった回廊の構造と規模は、既往の調査で判明している北面回廊と整合することから、東金堂院北面回廊が従来 of 復元案よりも東へ延び、東西100 m以上となることが確定しました。東金堂院には、『興福寺流記』や興福寺を描いた絵画資料などから、東金堂と五重塔の他にも建物があつたことが指摘されています。東金堂院の規模が従来よりも大きくなることによって、東金堂院の内部構造を再検討する必要性が生じるとともに、興福寺における東金堂院の性格を考えるうえで重要な成果を提示することができました。

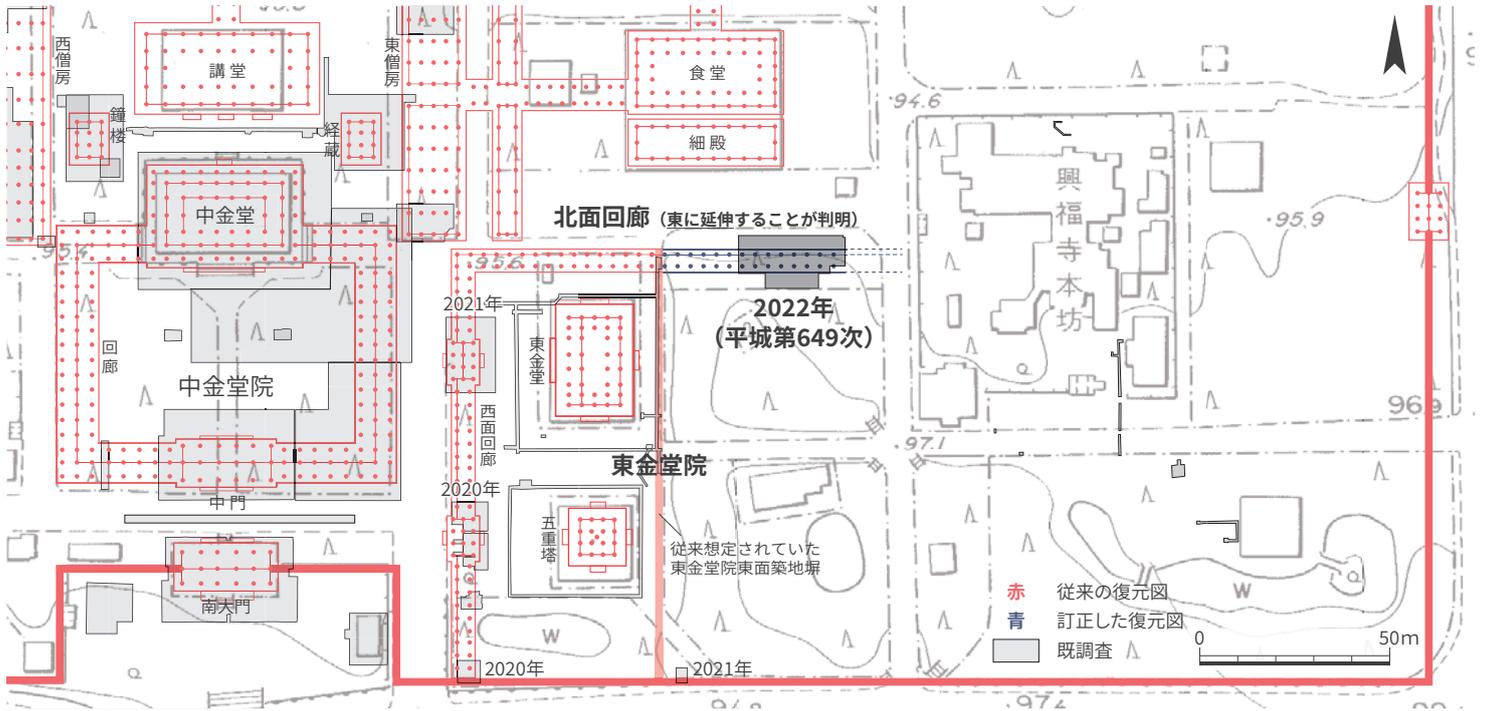


図1 調査区位置図 1:2000

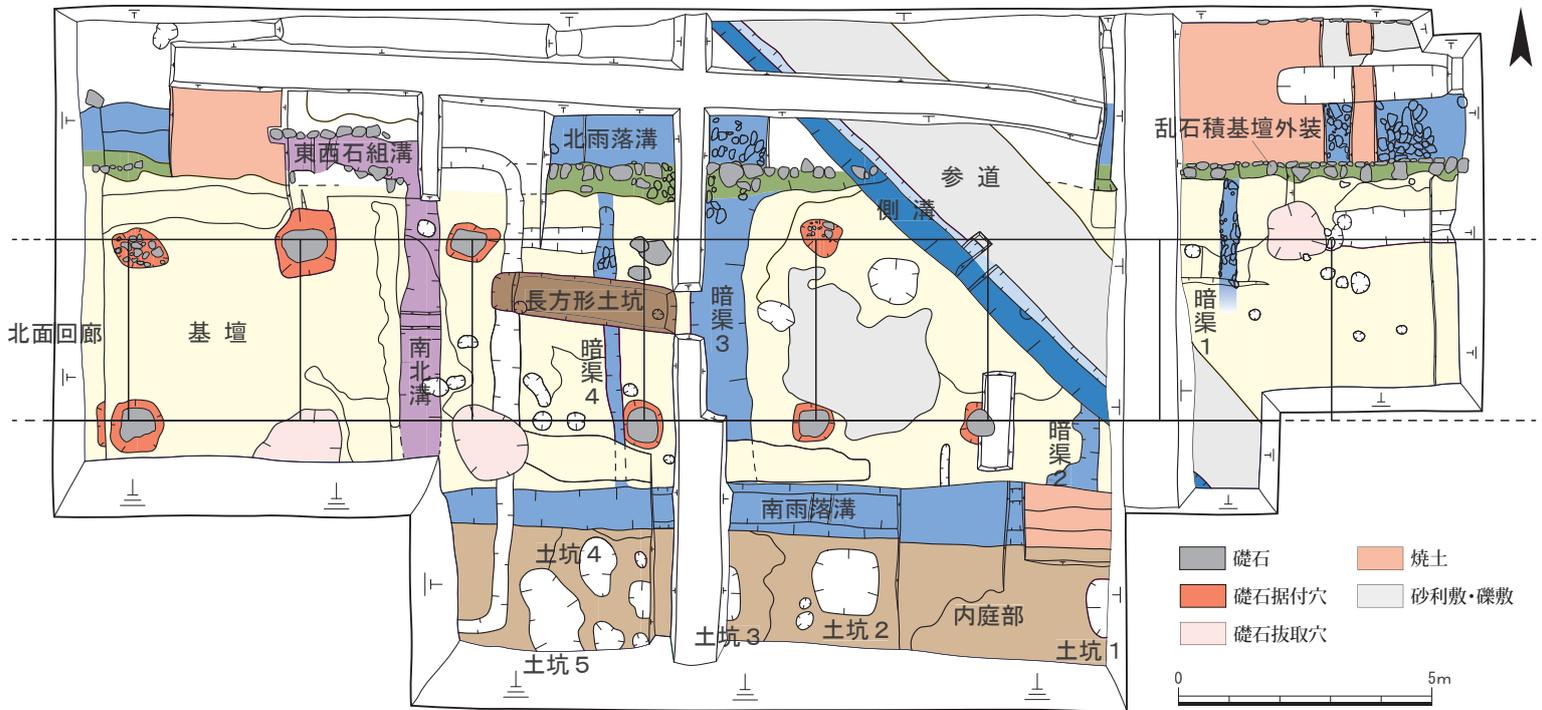


図2 平面図 1:150